アトリエ訪問

第 22 回

青木野枝

彫刻家

鉄という素材に魅了され、
40年以上にわたって鉄を使った彫刻作品を制作している青木野枝。
重たい金属というイメージをもつ鉄を素材に用いながら、
見る者に軽やかささえ感じさせる彫刻作品は、どのように生み出されているのか。
作家人生のほとんどを共にする「鉄」への熱い思いについても語ってもらった。

撮影 永野雅子

制作時間の99パーセントを占めるという、鉄板を切り出していく作業。
青木さんが最も大切にしている過程だ。

アトリエの入り口。扉に書かれた「クマタマ」は、
アトリエの名前だそう。

切り出した鉄を組み合わせた、
作りかけの作品。

都心からほど近い場所にありながら、豊かな自然の中に建つ風変わりな平屋。そこが、青木さんのアトリエだ。倉庫のようにも見える建物に一歩足を踏み入れると、その広大さに驚かされた。

「やっぱり鉄ってすごいなと、やればやるほど思います。」

――すごく特徴的で、おもしろいアトリエですね。

青木　特徴的というか、鳥小屋ですからね(笑)。ここを借りはじめて、40年くらい経ちますが、元々は養鶏場だったんですよ。作品作りに、とにかく広いスペースが必要なので、私にとってはこういった場所がちょうどいいんです。

――スケールの大きな作品をどのように制作されているんでしょうか。

青木　まずはざっとスケッチというかプラン図を描いて、その中に人物も描き込んで、作品がどのくらいの大きさになるのかイメージします。そして、制作に入ると、ひたすら鉄板を溶断(※)します。制作過程の99パーセントは溶断なので、1日中切っているという感じです。それから、運び出せる大きさまではここで溶接していきます。パーツはトラックで運び、あとは展示場所で足場を組んでつなぎ合わせて、作品を完成させます。大きなものだと47メートルにもなります。

――制作過程の99パーセントが溶断ということに驚きます。

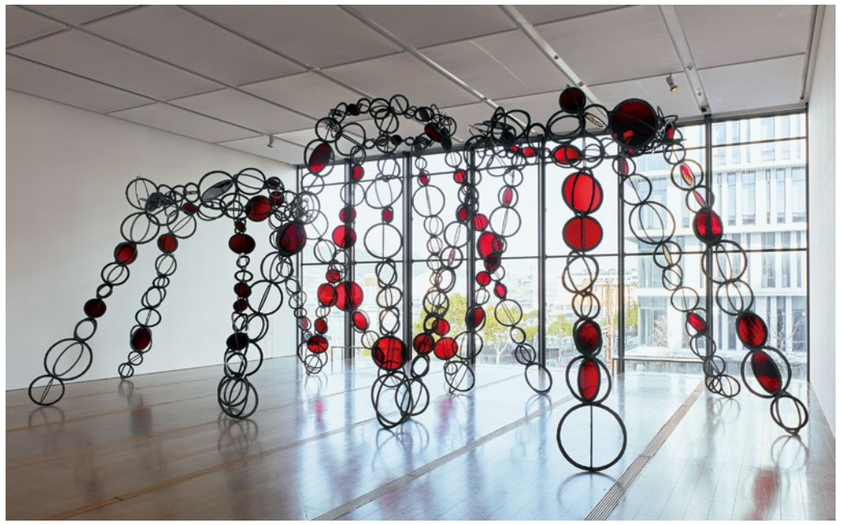
青木　私にとって溶断は、画家が線を描くのと同じこと。だから、人に任せず、すべて自分でやります。

溶断すると、初めてこの世界にその鉄の断面が姿を現し、空気に触れる――。その瞬間が好きで。厚い鉄に熱を入れていくとオレンジ色になって、もっとやっていくと白く、真昼の太陽みたいに輝いてだんだん溶け出していく。それを酸素の圧力で切るのですが、切らずにそのままにしておくと、周りから冷えていって、中が赤くて外が黒くなっていく。それが半透明に見えるようなときがあり、すごくきれいだな、と昔から思っていて。私にとって鉄は半透明な金属で、重たい素材だという印象を抱いたことはないですね。

――長く一つの素材と向き合う中で、考え方などが変わってきたことはありますか。

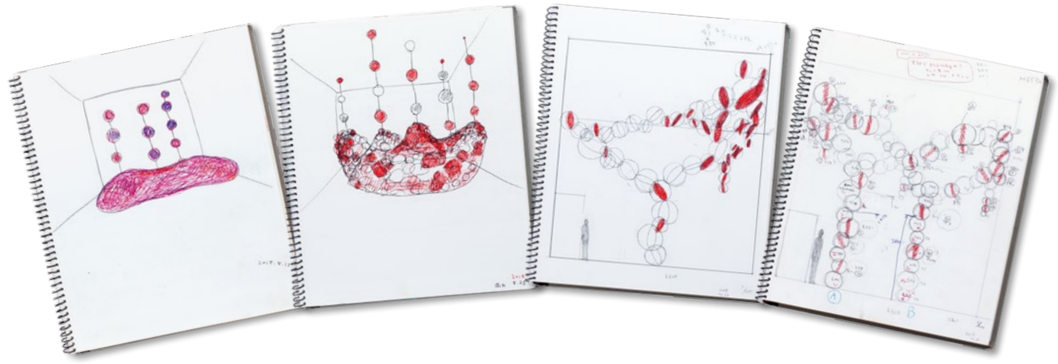
青木　鉄に対して「尊敬」という言葉がふさわしいのかはわかりませんが、やっぱり鉄ってすごいなと、やればやるほど思います。鉄は水中にも地中にもあるし、隕鉄(いんてつ)という宇宙から来るものもあるし、自分の体の中にも鉄分というものがあって、鉄は昔から身の回りにいっぱい存在していて――。だからなのかな、鉄が、とにかく大好きなんです(笑)。

※金属に熱を加えて切断すること。



撮影:山本糾　©Noe Aoki Courtesy of ANOMALY

上／スタッフと協力して、
美術館で作品を組み立てている様子。
左／長崎県美術館での展示。
ふりそそぐものたち／長崎
鉄、ガラス　高さ580㎝　2019年
下／長崎での個展のためのアイデアスケッチ。
制作に入る前に、たくさんのスケッチをして構想を練る。



――赤いガラスがはめ込まれているのはなぜですか。

青木　直感的に使いたいと思ったので言語化するのは難しいんですが、色については、長崎のつらい歴史から血をイメージしたのかもしれないし、贖罪(しょくざい)の意味があるのかもしれない。おそらくこの先、他の作品では使うことのない、長崎のための赤なんです。

――場所とのかかわりを大切にした作品なんですね。

青木　これに限らず、私の彫刻って、展示が終わったら解体して跡形もなくなるんですよ。展示空間に合わせて作るので、同じ作品は二度と作れない。だから、その場所に置くことの意味を大切にしています。

あおき・のえ
1958年東京都生まれ。83年武蔵野美術大学大学院造形研究科修了。第50回芸術選奨文部大臣新人賞、第33回中原悌二郎賞優秀賞、第55回毎日芸術賞などを受賞。活動初期より鉄に魅せられ、40年以上に渡って工業用の鉄板などを用いた“場”と深く呼応する彫刻作品を手がける。国内外で精力的に個展を開催するほか、大地の芸術祭、瀬戸内国際芸術祭などの芸術祭にも数多く参加している。多摩美術大学客員教授。